

2023年「国際ジェンダー学会研究活動奨励賞」研究活動報告書

1. 提出日：2024年5月31日

2. 提出者氏名：加藤穂香

3. 申請した研究テーマ：「デジタルメディア時代における〈ジャーナリズム界〉の変容：「女性ジャーナリスト」へのインタビュー調査から」

4. 研究活動報告

近年、日本のメディア業界におけるジェンダー課題への向き合い方は変化しつつある。もちろん日本の新聞社や放送局各社における女性役員の割合は依然として低く、メディア業界の旧態依然とした体制が問われる課題が噴出している。一方で、よりインクルーシブな社会づくりを志向する特集記事やメディアコンテンツの制作もおこなわれているほか、『マスコミ・セクハラ白書』（WiMN 編 2020）や『失敗しないためのジェンダー表現ガイドブック』（新聞労連ジェンダー表現ガイドブック編集チーム 2022）といった書籍も出版され、業界内部からの問題提起もおこなわれている。

また、女性ジャーナリストたちが集まる「薔薇棘勉強会」（清水 2019）やデジタル時代のジャーナリズムを考え学ぶ「デジタル・ジャーナリスト育成機構（D-JEDI）」といった活動を通じて、ジャーナリスト同士の業界横断的な交流もおこなわれている。

本研究は、ジャーナリストたち、特に男性中心的とされるメディア業界で働く女性ジャーナリストたちの経験を明らかにしつつ、ジャーナリスト同士で築かれるネットワークが、既存の体制に対してどのような関係にあるのか——対抗的なのかあるいはむしろ親和的なのか——を明らかにすることを主眼としてきた。

本研究では、主に以下の2つのことをおこなった。

・聞き取り調査

フリージャーナリストとして活動する中堅～ベテランの女性および男性のジャーナリストに聞き取り調査をおこなったほか、機縁法を用いて出版業界で働く編集者およびその業界関係者にコンタクトをとり、予備的な聞き取り調査を実施した。

彼ら・彼女らのジェンダー意識は、必ずしも年齢やジェンダーによって異なるというわけではなく、取引先、同業者、取材対象者といったアクターとの複雑な関係のなかで形成されていく様子が見えてきた。特にフリーランスとして活動するジャーナリストたちは、雇用形態あるいは報酬を受け取る形式も様々であり、ジャーナリスト同士の連帯の重要性に対する意識も多様であった。またAIの活用やソーシャルメディアでの発信といったデジタル技術の利用に対する考えも少しずつ異なっており、これはフリーランスという自律性の高い働き方における仕事の効率化に対する意識や手法の違いが背景にあることが予想される。

・資料調査

聞き取りを進める過程で、業界内部にも細分化されたルールや慣習があり、新聞・出版・テレビといった各業界での実践を単純に「ジャーナリズム業界」のものとしてまとめるのは難しいことを強く認識した。そこで当面の研究の焦点を出版業界にあて、資料調査を進めることにした。

資料調査においては、日本出版労働組合連合会が2005年まで発行していた『出版レポート』、そして『創』や『総合ジャーナリズム研究』といったメディア系雑誌、また出版関連業界のフリーランスのユニオンである「出版ネッツ」が発行した資料におけるジャーナリストや編集者の語りを集め、分析した。

これらの資料から、暫定的な知見として、出版業界においてはフリーで活動するジャーナリストの存在が特に1950年代後半の週刊誌ブームをきっかけに求められたこと、また雑誌の誌面の制作過程や、業界関係者間のやり取り、あるいはフリーランスと正社員の分業体制とともに、（フリー）ジャーナリ

ストたちを取り巻くジェンダー関係は複雑性をもって構築されることがわかってきた。たとえば女性誌の誌面において働く自立した女性像が理想的なものとして提示されたとしても、その作り手が生きる現実はその理想像とは必ずしも合致しない。業界内における女性編集者・ジャーナリストとしての立ち位置や、編集長の方針、社会・読者の要請などが交渉され、誌面が作られるのだ。そのほか1980年前後の時期の『出版レポート』には、「出版労連婦人会議」による、業界内での女性たちの地位やキャリア形成そしてそこに伴う困難を取り上げたアンケート報告が載っており、フェミニズム的な意識を持った活動が出版業界内部でおこなわれていたことも確認できた。

以上の調査結果から、日常的に関わりを持つ人々との関係とともにジャーナリストたちの経験やジェンダー意識に違いが生まれてくること、またジャーナリストたちのネットワークにおいて、既存の男性中心的な業界体制に対して明確に対抗的な立場が取られる場合と、より入り組んだ戦略が取られる場合とがあることが見えてきた。今後は、聞き取り調査を継続し、調査対象者の範囲を出版業界関係者以外にも広げていくことを検討するほか、資料調査についても、実際に発行された雑誌の内容と作り手の経験を照らし合わせながら分析し、今後の論文の投稿につなげていきたい。

本研究テーマに関連する内容は以下の研究会・学会で発表した。

加藤穂香 (2023) 「デジタル・フェミニズムを取り巻く日本のメディア環境——フェミニズムとジャーナリズムの相互作用から考える」日本メディア学会 第38期第32回研究会「デジタル・フェミニズムの現在」(於:東京大学)

加藤穂香 (2023) 「日本の女性誌業界におけるジェンダー化——雑誌の作り手の語りから」カルチュラル・スタディーズ学会 カルチュラルタイフーン 2023 (於:早稲田大学)

参考文献:

新聞労連ジェンダー表現ガイドブック編集チーム (2022) 『失敗しないためのジェンダー表現ガイドブック』小学館

清水麻子 (2019) 「日本におけるジャーナリストネットワークと社会的弱者支援の可能性——女性ジャーナリストの会「薔薇棘勉強会」の活動と2016年の改正児童福祉法成立の関係性に着目して」『マス・コミュニケーション研究』94, 169-186.

WiMN 編 (2020) 『マスコミ・セクハラ白書』文藝春秋